



から15年の間、あらゆる所でこの世界に入り窯を持つ女性が増えてきているということです。最後に、1993年から京都で活動しているポルトガル人陶芸家のクリスティーナ・マールさんは、世界的にみても家庭生活とは別のことに取り組むのは女性よりも男性の方が多いが、日本では特にそうだとおっしゃっていました。その理由としては、日本は家庭中心の社会であり、その日本の核

となる部分を支えているのは女性であることが挙げられました。そのため、女性が専門的な職業にフルタイムで従事することはとても難しいということです。

「日本における外国人陶芸家」というテーマで研究するうちに多くの疑問が生じたため、また、将来博士号を取得するためにさらに分析を深めたいと思います。

植民地期の朝鮮の工業化と地域社会 —朝鮮窒素肥料株式会社の事例を中心に

梁 知恵
(漢陽大学校)



私は2014年2月11日(火)から27日(木)まで、訪問研究員として神奈川大学非文字資料研究センターを訪れた。滞在中にはセンターの配慮のおかげで、関連史料館を訪問し、多くの研究者と面談することができた。

訪問研究テーマは「植民地期の朝鮮の工業化と地域社会—朝鮮窒素肥料株式会社の事例を中心に」である。朝鮮窒素肥料株式会社(現在は水俣病の原因企業として知られているチッソ)日本窒素肥料株式会社の植民地子会社である。この会社は水力発電所を設立して工業用の電力を生産し、ここで得られた水力発電を基にして咸鏡南道の咸興、興南に大規模な化学工業団地を設立した。

いわゆる、「日窒コンツェルン」の中心を形成したこの地域の特徴は、大きく3つにまとめることができる。まず、帝国型工業開発の主要な事例としてみられる点である。企業主の野口遵は親会社の本社を大阪に、子会社の本社を京城に設立したが、実質的には主要な工場がある熊本県の水俣と宮崎県の延岡、そして朝鮮の咸鏡南道地域を巡回しながら企業を導いた。換言すれば、この事例は日本帝国の企業が形成される過程の主要な断面をみることができるともいえる。

2番目は企業の進出と同時に行われた企業城下町の形成に関してである。植民地時代の企業の背後にある都市は建築史や都市計画史的にも非常に重要な事例である。さらに、社会史的にも土地の補償(不動産)の経済と日本の本土から植民地への移住に伴う中産階級の経済を示す非常に重要な事例でもある。

3番目は軍産都市という点である。化学工場の特性上、1930年代後半に戦時体制が本格化される過程の中で、

この地域での軍需工場や軍需用職業訓練所などが急激に増設されていった。またこの時期に海軍との技術協力、委託事業が推進されており、イギリス軍人とオーストラリア軍人の捕虜収容所が設立された。

このようにこの地域は植民地期の朝鮮の社会経済史を説明するために重要な事例として取り上げられてきた。しかし、従来の研究は「植民地近代化論」と「植民地収奪論」という二つの極端な立場を立証するための手段としてこの事例を挙げたことが多かった。私は個人、集団、ひいては国家に至るまで、さまざまな層位を設定し、これらの間の「関係網」という概念を使ってこの事例にアプローチしてみようと考えている。つまり、既存の研究では工業団地という「規模の経済」に焦点を当てていたが、私は具体的な行為者に焦点を合わせて、個人インタビューと文献資料収集を通じて研究を進めている。

今回の訪問調査期間には神奈川大学図書館と非文字資料研究センターをはじめ、国立国会図書館、拓殖大学の旧外地関係資料コーナー、学習院大学の友邦文庫などの資料館を訪問した。植民地時代に発刊された複数の関連史料と回顧録などを収集することができた。また、森武磨指導教授と4名の研究者を同うことができた。まず、君島和彦教授は教育史、特に歴史教育者として韓国では日韓関係史における非常に有名な学者である。口述インタビュー時の留意点と私の研究テーマの妥当性について説明してくださり、研究者としての姿勢に関して非常に貴重なお話を聞くことができた。そして小野沢あかね教授はジェンダー史の研究者として軍の慰安婦問題などを研究してきた学者である。研究テーマについて貴重なアドバイスをしてくださった。柳沢遊教授は経済史専攻で

満州の商工人について研究している学者である。日本国内の経済関連資料について紹介していただき、私の研究テーマについてもアドバイスしてくださった。水野直樹教授は韓国近代社会史の研究者である。今回は日本国内の関連研究の現状を紹介してくださった。また「北遺族連絡会」からの依頼で2013年に咸鏡南道へ訪問し、日本人の埋葬地を見回った経験談を聞くことができた。

今回の訪問調査で収集した資料を中心に、もっと本格的に研究を進めることができたようになった。また「研究者」として亀鑑になる先生方にお会いすることができ、研究者としてのアイデンティティにも多くの影響を受けた。訪問調査という貴重な経験をする事ができたことに改めてお礼を申し上げたい。



Feb. 6, 2014



Oct. 18, 2013



Feb. 26, 2014



Dec. 19, 2013



Nov. 15, 2013



Nov. 22, 2013



Dec. 20, 2013



Feb. 26, 2014



Nov. 15, 2013